



図79 吉備池廃寺地形図 1:2000

著な瓦の散布が認められる東南部の一角を除いて、堤防の内側はすでにコンクリートの擁壁が完成している。今回の調査（第81-14次調査）は、この残りの部分にどういった遺構が存在するのかを確認するためにおこなった、奈良国立文化財研究所と桜井市教育委員会の共同調査である。なお、それとは別に、吉備池に給水する水路の改修に伴う立会調査（第81-16次調査）も実施しているが、こちらでは顕著な遺構を確認していない。

今回の調査地は、堤防の一部が内側に張り出した土壇状を呈している。調査では、基準点測量・地形測量のうち、瓦窯の存在を想定して、事前にまず対象地の地中レーダー探査と磁気探査を2回にわたって実施した。しかしながら、瓦窯らしい反応はなく、むしろ基壇版築層らしい反応が得られるという結果となった。

こうした状況下で発掘調査に入ったわけであるが、そ

れは、まさに探査成果を裏づけるものとなった。瓦窯ではなく、飛鳥時代の寺院（過去の吉備寺比定地と区別するため、「吉備池廃寺」と命名）の金堂と考えられる巨大な基壇の存在が明らかとなったのである。

発掘は、まず、一連の護岸擁壁が延長される可能性のある池岸部分を対象にして、土壇の西辺から着手した。ここで、掘込地業と版築土の存在により、建物の基壇であることが確定する。同時に、西北角の部分を含めた基壇の西辺と北辺が明らかとなった。

次に、それを受けて基壇規模を確認すべく、土壇上に南北・東西トレンチを設定した。これは、事前の探査で土壇の中央付近を東西に走る段差の存在を認めており、基壇端の可能性を想定したためである。しかし、トレンチ発掘の結果、それは畑の耕作による段差で、基壇土は現在の土壇よりも外側に広がることが明らかとなった。

そこで、基壇端を確認するため、土壇の東と南に改めて調査区を設定した。この結果、東辺については、掘込地業の端を検出し、基壇の東西長がほぼ確定した。一方、南辺については、土壇南側の調査区までは基壇がのびないことが判明したが、水路などの存在により、基壇端の正確な位置はつかめなかった。したがって、基壇の南北長については、概略の数値を把握したにとどまる。

今回検出した遺構は、この飛鳥時代の建物基壇と東側の砂利敷のほか、掘立柱の柱穴、基壇の北と西をめぐる近世の素掘溝、近現代の盗掘坑をはじめとする土坑などである。以下、おもなものについて述べる。

2 金堂の遺構

現在の土壇がすっぽりと収まる巨大な基壇であり、掘込地業をとまなう。基底部分の土層は、場所によって一定しないが、地山(自然堆積層)である暗青灰色微砂(西辺・南辺)、暗灰褐色～青灰色砂礫(北辺)または灰黒色粘土(東辺)の上に、少量の土器片を含む暗褐色砂質土がのびるのを基本とする。金堂基壇は、これをベースとして構築されている。なお、西辺では、この上に薄く青灰色微砂をおき、北辺では、地山を掘り上げた暗灰褐色砂質土ほかの整地土を積む。

掘込地業 掘込地業の深さは、ベースないし上記の整地土の上面から0.9～1.1mに及び、この底面から、版築による基壇土を積み上げている。これには、地山に由来する青灰色微砂も含まれるが、大半は黄灰色～橙褐色の山土である。各層の厚さは2～15cmで、5cm程度の部分が多い。また基壇西辺部では最下部に多数の礫をまじえていた。掘込地業の底面の標高は、東辺が79.9m、南辺が79.6m、地形的に最も低い西北角が79.3mである。

掘込地業の範囲は、東西が36mと確定し、南北は、27m以上30m以内であることが判明した。ただし、西辺と北辺では、掘込地業の範囲を越えて基壇版築土が広がっており、基壇の規模が、もうひとまわり大きくなることは確実である。東西37m、南北28mほどの基壇になるものと推定される。

なお、基壇西南部に設定した調査区では、掘込地業の西辺がいったん東へ屈折したのち、さらに南に折れることを確認した。掘込地業の平面がこのように屈折する理由は明らかでなく、反対側の東南隅や南辺がどういう形



図80 掘込地業の排水溝(北西から)

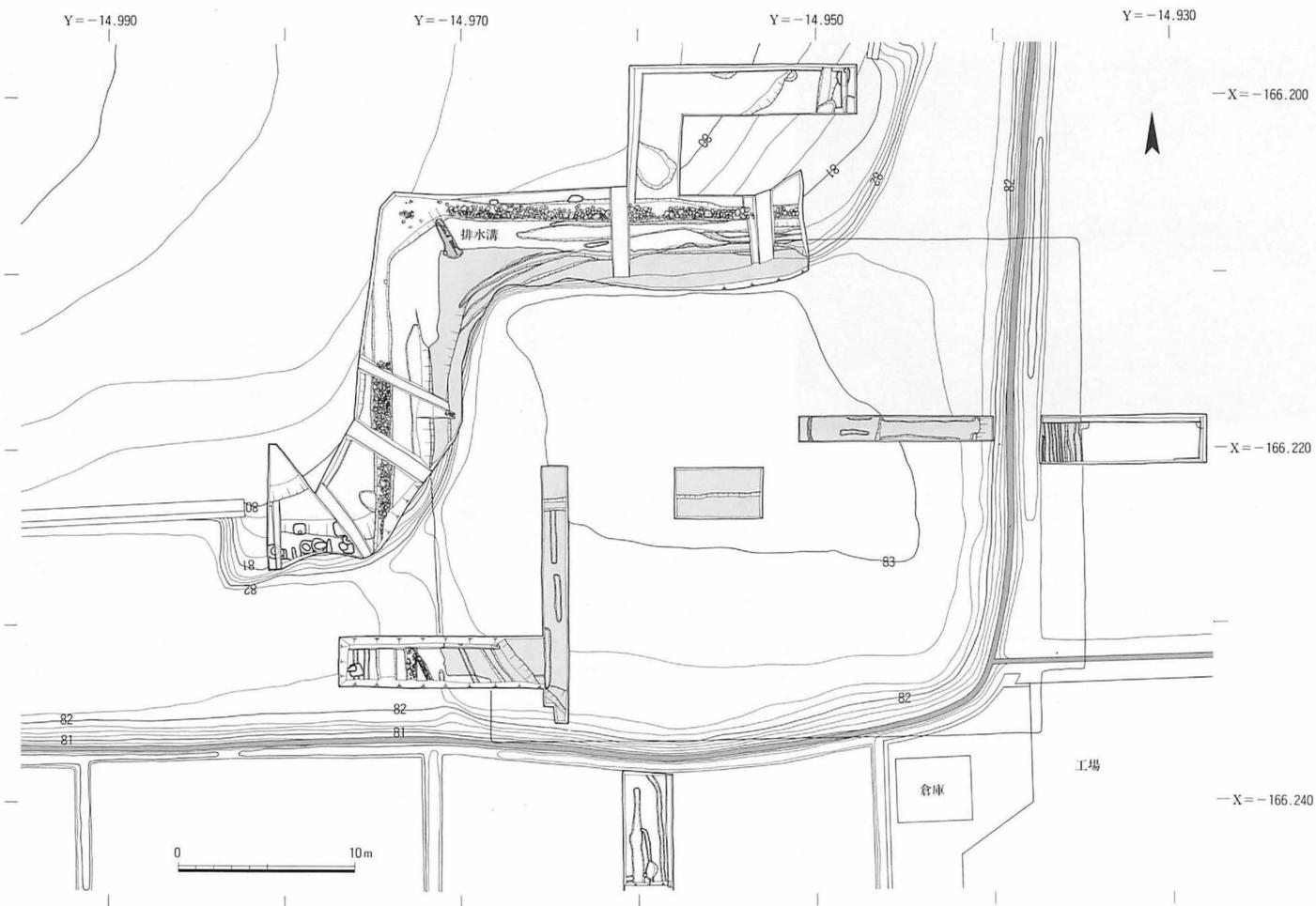
状となるかも不明である。長方形の隅を欠いた形をとるのか、あるいは階段などによる複雑な出入りをもつのか、今回の調査からは判断しがたい。ただ、階段部分の積土は、本体部分の版築を終えたのちに継ぎ足す例がほとんどで、階段部分を含めた掘込地業をおこなう意味は希薄である。いずれにしても、掘込地業南辺の形状については、今後の課題としておく。

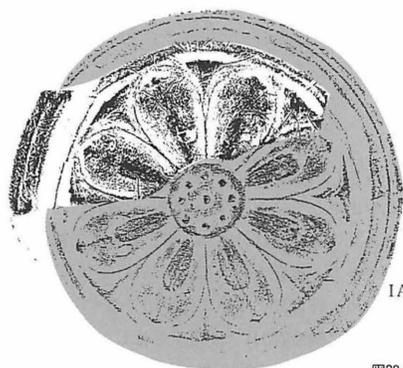
掘込地業の排水溝 掘込地業の西北角には、排水溝が掘削されていた。掘込地業の中に溜まる水や版築土中の水分を抜くため、地形的に最も低い場所に設けたものである。端部が後代の溝により破壊されているが、2.1mにわたって残る。幅0.5～0.6m、検出面からの深さは、掘込地業の肩で0.7mある。底面はほぼ水平で、掘込地業の底から0.1～0.15m低い。溝底の標高は79.2mである。溝の下部には、掘込地業から連続する拳大～人頭大の礫を多数含み、上部は一時に埋められていた。

基壇 基壇の上面は削平を受けているため、本来の基壇高については知ることができない。しかし、掘込地業の底面から版築土上面までの高さは、現状で2.5～2.7mに達する。また、この上部には、厚さ0.7m内外の耕土層があり、その大半は基壇土をすき込むことによって形成されたものとみられる。おそらく、本来の基壇は、掘込地業底面から3m以上、地表面から2m以上に及び、ひじょうに高いものであっただろう。

ただ、今回の基壇上面における調査は、幅の狭いトレンチによるもので、しかも遺構の保全を第一として、基壇土の掘り下げをおこなっていない。そのため、礎石拔

図8 吉備藩寺運轉庫 1:300 準、網目は基準土





1
1A (出土品)



2
1B (松田光氏所蔵品)

図82 吉備池廃寺の軒丸瓦 1:3

取穴の一部がかかっている可能性が高い箇所もあったが、確定はできなかった。礎石の据えつけおよび抜き取り痕跡や、それから復元される柱配置の解明は、将来の全面的調査に委ねることにしたい。

このほか、基壇外装についても、削平および後代の溝の重複により、その痕跡を認めることはできなかった。また加工痕をもつ石材や凝灰岩片も全くなく、基壇外装の形状については不明である。

なお、発掘調査では、火災に遭った痕跡はまったく認められなかった。建物の廃絶理由が、焼失によるものでないことは確実である。

3 その他の遺構

金堂基壇外周の溝 基壇の西辺と北辺には、人頭大ほどの自然礫を多数落とす込んだ素掘りの溝がめぐっている。幅0.8~1.3m、検出面からの深さは0.6~0.8mである。溝の方向は掘込地業の肩とほぼ平行するが、両者の間隔は、西辺が2.5m、北辺が1.5mと異なる。

この溝は、人為的に埋められた状況を呈しており、埋土の中から、近世の染付が出土した。なお、堤防の積土からも近世の陶磁器が出土することから、吉備池の築造が近世に降ることは明らかで、それ以前は水田であったと推定される。上記の溝は、水田耕作の際に支障となる礫を廃棄するために掘ったものであろう。

ただし、こうした礫は、本来、金堂基壇に伴うものであった可能性が高い。後代にわざわざこの場所まで運び、さらに廃棄する必要は認めがたいからである。礫の数量や大きさからみて、礎石の根石、基壇周囲の雨落や犬走などの機能が想定されよう。また、礫を廃棄した溝が東辺になく、地形的に低い西と北の二辺にあることから、基壇基底部の高さをそろえる何らかの工作に伴う可能性もある。いずれにしても、基壇の高さを勘案すると、乱石積の基壇外装とは考えがたいと思う。

砂利敷 基壇東辺部の調査区において、基壇の外側に径3~5cmの砂利敷を確認した。金堂の廃絶後は灰色粘土層で覆われるが、この部分では、当時の地表面が遺存していることになる。金堂周囲の舗装状態を示すものとして重要である。砂利敷上面の標高は、80.8mである。

掘立柱穴 金堂基壇の西と北東で、掘立柱掘形と抜取穴を検出した。建物の一部とみられるが、規模は確定しがたい。柱穴には少なくとも3時期の重複がある。うち2時期の柱掘形には、基壇土に近い山土が多量に含まれており、金堂造営開始後のものであろう。一方、山土を含まない残りの柱掘形は寺院造営に先行する可能性が高い。この抜取穴から、7世紀中頃の土師器杯Cが出土した。吉備池廃寺の建立時期をうかがわせるものである。

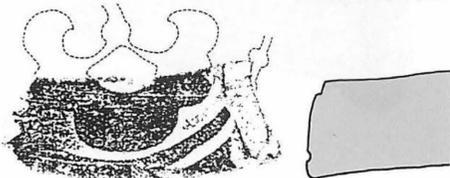
4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、瓦類のほか土器類、金属製品、石製品があるが、瓦を除くと量的には僅少である。土器類は、土師器・須恵器・瓦器・近世陶磁器・埴輪など、あわせて整理用木箱で3箱分、金属製品は、寛永通宝1点と鉛玉（鉄砲玉）1点、石製品は弥生時代の磨製石斧1点などが出土しているにすぎない。以下、瓦類について概略を述べる。

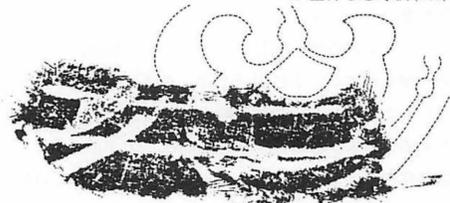
軒丸瓦 軒丸瓦I（以下、型式名は、大脇前掲論文による）は、18点出土した。うち、1Bと比べて文様の割付にやや乱れのある1Aと確定できたものが5点あるが（図82-1）、小片が多いため、1Bと確定できたものはない。3月下旬に、神奈川県在住の松田光氏のご厚意により、氏所蔵の吉備池廃寺採集の軒瓦（佐野美術館『仏教美術入門展』図版89 1988年）を実見したが、その中には1Bもある（図82-2）。今後の吉備池廃寺の調査で、1Bも見つかるであろう。1A・1Bとも外縁に五重圏紋をめぐらし、三重目が太い。山田寺などの山田寺式軒丸瓦も、重圏紋の外側から二重目が太く、後出の瓦に継



1 型押し忍冬紋 (Ib1)



2 型押し忍冬紋 (Ib1)



3 三重弧紋を伴う型押し忍冬紋 (Ib2)

図83 吉備池廃寺の軒平瓦 2:3

承された特徴である。丸瓦部は、広端の凹面側を斜めに削り、カキヤブリを加えて瓦当裏面に接合する。

軒平瓦 型押し忍冬紋軒平瓦 I b₁ が5点、それに轆轤挽きの三重弧紋を加えた軒平瓦 I b₂ が1点出土した。

忍冬紋は、若草伽藍213B (1a) と同一のスタンプを使用しているが、傷はそれより進行している。若草伽藍と異なり、スタンプを上下交互に押ししていないので、唐草紋の効果が出ていないし、瓦当面が3～4cmと幅狭いため、スタンプが瓦当面からはみ出て、忍冬紋が3分の2しか表出されていない (図83-1・2)。

7世紀前葉の若草伽藍では、手彫り、スタンプ、軒丸瓦用範型、軒平瓦用範型による、日本初の紋様をもつ軒平瓦を製作する試みが進行していた。しかし、213Bのスタンプを、若草伽藍の瓦工房から吉備池廃寺の工房へ運んで使用した瓦技術者は、若草伽藍の軒平瓦に関する情報を熟知していなかったのである。

丸・平瓦 丸瓦は1,530点 (248kg)、平瓦は8,206点 (912kg) が出土。ともに厚手品 (厚さ20～25mm) が主体で、凸面は叩き目を完全になで消す。丸瓦は玉縁式である。さらに、平瓦のうち重量にして約9%が、硬質で薄手 (厚さ10mm前後) であり、その多くが凸面に平行叩きや格子叩きを施す。おそらく小型平瓦であろう。しかし、これと組み合わせるべき硬質で薄手の小型丸瓦は皆無に等しい。

木之本廃寺との比較 木之本廃寺では、吉備池廃寺の軒

丸瓦 I A・I B、型押し忍冬紋軒平瓦 I b₁・I b₂ と同範の軒瓦が出土している (『藤原概報16・17』)。それによれば、軒丸瓦の瓦当径は約21cm、軒平瓦の瓦当幅は約36cmに復原できる。両廃寺間の範傷関係は、吉備池廃寺例が小片のため、軒丸瓦については不明である。軒平瓦は、いずれも若草伽藍213Bより傷が進行しているが、両廃寺の前後関係は今後の課題である。また、両廃寺における軒丸瓦の接手法は同一であり、軒平瓦の忍冬紋の向きと瓦当幅の薄さも共通する。さらに、これらにともなう丸瓦と平瓦の多くがいずれも厚手で、他に硬質・薄手の小型平瓦を一定量含むことも両廃寺に共通する。

なお、木之本廃寺の残存状況が良好な例を参考にすると、丸瓦と平瓦の全長は、ともに36cmほどになる。吉備池廃寺と木之本廃寺の瓦は、軒瓦の瓦当はもちろん、丸瓦・平瓦も飛鳥時代の他の寺院を凌ぐ大きさであり、大規模な金堂にふさわしい。

まとめ

基壇の性格 今回検出した基壇は、東西37m、南北約28mにおよぶ巨大なもので、面積にして1000㎡を越える。また、地表面からの基壇高も2mに達し、伽藍の中心的な建物であることは間違いない。平面が正方形でないことから、金堂または講堂とみられるが、飛鳥時代の講堂は、飛鳥寺や山田寺のように、桁行 (8間) が梁間 (4間) の2倍近い細長い平面となる例が多く、基壇の高さも塔・金堂に比べて低い。この点から、講堂とは考えがたく、金堂であることは確実であろう。

ここでは、比較のため、推古天皇が豊浦宮に即位した592年から694年の藤原遷都までを飛鳥時代とし、その間の主要寺院の金堂の平面を図示しておく (図84)。これから明らかなように、吉備池廃寺の金堂は、ほぼ同時期と推定される山田寺金堂の実に3.1倍、藤原京の官寺である本薬師寺金堂に比べても1.9倍の基壇面積を有する。飛鳥時代最大の金堂であることがわかる。

伽藍配置 金堂以外の堂塔については、発掘調査をおこなっていないため、伽藍全体については明らかでない。しかし、金堂土壇の西方に約50m離れて、やはり方形を呈する土壇が存在する事実が注目される。二つの土壇は正しく東西に並んでおり、形状とあわせて、吉備池廃寺の建物基壇であることは確実とみてよい。

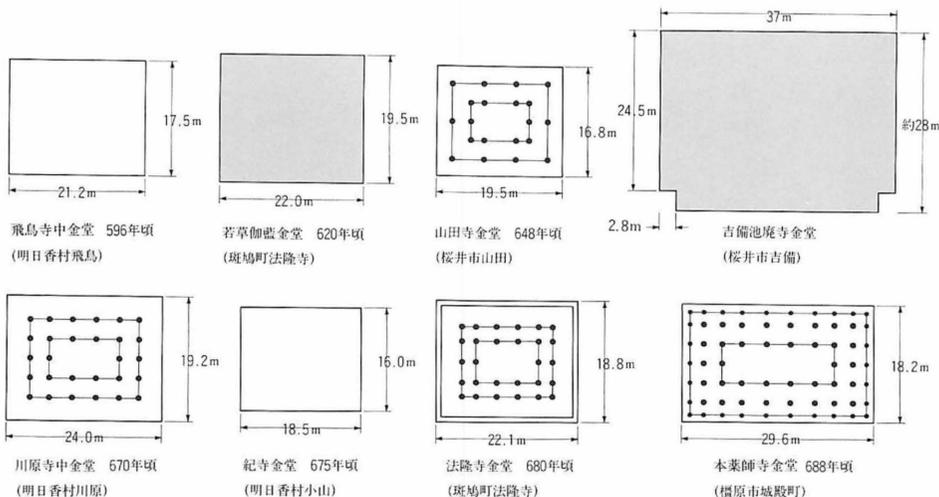


図84 飛鳥時代の金堂の平面規模の比較 網目は掘込地床

西方の土壇は、護岸工事により、北辺と東辺の原状が損われているが、金堂と同じく、かなり高い基壇と考えられる。また、工事前の写真や図面からみると、金堂土壇に比べて、より正方形に近い平面をもつようである。塔基壇と推定するのが妥当であろう。

したがって、吉備池廃寺は、東に金堂、西に塔を配した伽藍配置をとる可能性が高い。金堂が南面することから、伽藍の正面が南であることは動かないとみられるので、金堂と塔を並置した、いわゆる法隆寺（西院伽藍）式の配置が復原されよう。吉備池廃寺は、この伽藍配置の最古の例となる可能性がある。

また、その場合、金堂と塔の間隔が、心心間距離で84m前後ときわめて長大な数値となる。これは、法隆寺西院伽藍の塔・金堂心心間距離31.5mの2.7倍に達する。この点から、吉備池廃寺は、個々の建物のみならず、全体の伽藍もきわめて大規模であったと推定される。

ただし、塔跡と考えられる土壇は未発掘であり、上記の想定の正否については、今後の調査に委ねるほかはない。また、そのほかの施設、たとえば中門・回廊や講堂については、現状でまったくその徴証を得ることができない。発掘による伽藍全容の解明が期待される。

年代 吉備池廃寺から出土する軒瓦は、採集品を含めて、2種類の組合せしか知られていない。

軒丸瓦は、いずれも、山田寺にわずかに先行する特徴を備えている。『上宮聖徳法王帝説裏書』および発掘調査の所見によれば、山田寺の伽藍の中で最初に造営されたのは金堂であり、その建立は皇極2年(643)に始まっている。したがって、吉備池廃寺の軒丸瓦は、この直前の時期に位置づけられる可能性が大きい。

一方、軒平瓦は、若草伽藍で使ったスタンプを再利用しており、若草伽藍の主要部が完成した後の製作と考え

られる。若草伽藍は、643年の上宮王家滅亡時には、ほぼ完成していたとみてよい。吉備池廃寺の軒平瓦の製作年代は特定しがたいが、少なくとも、軒丸瓦と同時にして矛盾はないことになる。また、型押し忍冬紋の上に重弧紋を加えた軒平瓦の存在は、山田寺で成立する重弧紋軒平瓦への過渡的な様相を示すものとみられる。

以上のことから、吉備池廃寺の軒瓦は、643年創建の山田寺にわずかに先行する年代を与えることができる。いずれにしても、吉備池廃寺の軒瓦の製作開始が、640年から大きく隔たることはいらぬだろう。吉備池廃寺の軒瓦は、時期をきわめて限定できる資料なのである。

さらに注目されるのは、補修用の瓦がまったく存在しないという事実である。また、軒瓦以外の丸瓦・平瓦の出土量も僅少であり、とくに使用に耐えるような完形品は1例もない。こうした点から、吉備池廃寺がこの地で命脈を絶った寺院でないことは明らかである。短期間のうちに、ほかへ移建されたことは、間違いないであろう。吉備池廃寺で出土するのは、その際に残っていた再利用不能の瓦とみられる。

吉備池廃寺の性格 それでは、吉備池廃寺はどういった性格をもち、史料上のどの寺に相当するのだろうか。

まず、その規模からみて、一豪族の氏寺とは考えられない。この点でも、吉備氏の氏寺としての吉備寺にあてられる説は成立しえないと思う。吉備池廃寺とほぼ同時期の氏寺としては、大化改新後に右大臣となった蘇我倉山田石川麻呂の発願による山田寺がある。しかし、吉備池廃寺の金堂は、山田寺はもちろん、のちの官寺である川原寺や本業師寺をも遙かに凌ぐ規模を有しているのである。やはり、天皇家にかかわる寺院と考えるべきであろう。

また、吉備池廃寺の位置は、宮室が集中した飛鳥地域に近い。天皇家関係の寺院であればなおのこと、それに

関わる記録は残りやすいはずである。吉備池廃寺を、史料上の寺院の中に求める可能性は高い。

そこで、有力な候補として浮上してくるのが、百済大寺である。この寺は、『日本書紀』と『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下『縁起』）が、ともに舒明11年（639）の発願と伝える、日本最初の勅願寺であった。寺地の移転を伴う複雑な沿革をたどるが、その法燈は、高市大寺・大官大寺を経て、今の大安寺に伝わる。

百済大寺の所在については、現在の広陵町百済周辺に比定するのが通説だが、この一帯で、それに該当する遺構や瓦の出土は全く知られていない。一方、香久山の西北麓一帯に百済大寺を比定する見解もあり（和田萃「百済宮再考」『季刊明日香風』第12号 1984年ほか）、木之本廃寺はその有力な候補となっていた。従来から、木之本廃寺の軒瓦（＝吉備池廃寺の軒瓦）については、百済大寺のものとする見解が有力だったのである（山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』1983年、大脇潔「飛鳥の寺」1989年ほか）。

軒瓦から見た吉備池廃寺の年代は、まさしく百済大寺の年代と合致する。というより、現状で、百済大寺の瓦はこれ以外に求めがたいのである。この軒瓦を出土する遺跡は、いずれも、今まで寺院跡としての明証を欠いていたが、それが遺構として、しかも並外れた規模のものと確認された以上、吉備池廃寺を百済大寺と見る説は、考古学的にかなりの説得力をもつといえる。

また『縁起』によれば、百済大寺は、天武2年（673）に高市の地に移建され、高市大寺となった。『日本書紀』

も同年の造高市大寺司任命を伝えている。そして、これらも、吉備池廃寺が短期間のうちに他へ移転したという知見と符合するのである。

なお、その場合、吉備池廃寺と同範の軒瓦を出土する木之本廃寺は、高市大寺の有力候補となる。木之本廃寺を百済大寺に比定すると、その近辺に求めざるをえない高市大寺とが、あまりに近接した位置関係となってしまう。あえて移転する意味があったとは思われない。また、木之本廃寺周辺は、十市郡と高市郡の郡界が錯綜しており、古代にいずれに属したか即断できないが、吉備池廃寺の地が一貫して十市郡に属したことは、ほぼ疑いない。吉備池廃寺を高市大寺にあてるのは困難である。

このほかにも、吉備池廃寺の周辺には、「カウベ」や「コヲベ」「高部」といった地名があり（榎考研編『大和国奈良復原図』1980年）、『縁起』や『日本三代実録』の記事から百済大寺近傍にあったとみられる「子部社」「子部大神」との関連をうかがわせる。また、金堂の南方では、過去の発掘で旧河道を検出しており（前園実知雄「橋本冠名遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1984年度』1985年）、『日本書紀』『縁起』がともに百済大寺の所在を「百済川の側」と伝える記事との関係も注意される。

以上のことから、なお問題とすべき点は少なくないが、吉備池廃寺が百済大寺である蓋然性は、きわめて高いと考える。史料との整合性をはじめ、残された課題については、伽藍全体の解明とともに今後の解決に委ね、ここでは、ひとまず吉備池廃寺を百済大寺にあてる仮説を提示しておくことにしたい。（小澤 毅／史料 瓦；佐川